

紹興方言の存在表現??V?????V?????V亨??

著者	宋 天鴻
雑誌名	研究論集
巻	113
ページ	135-150
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.18956/00007962

紹興方言の存在表現“V帯” “V咚” “V亨”

宋 天 鴻

要 旨

中国紹興方言において、動作の結果として具体物が特定の空間領域に存在することを表す文法形式は“V帯”“V咚”“V亨”の三体系に分かれている。本稿ではその三者の使い分けに関して、新たに「具体物へのアクセスに対する制御権」という基準を提唱する。その基準から見ると、話し手が制御権を持つ領域での存在に“帯”、聞き手が制御権を持つ領域での存在に“咚”、話し手も聞き手も制御権を持たない領域での存在に“亨”が用いられているということが分かる。「制御権の帰属」を決定づける要素に対しても考察を行い、「物理的距離」「具体物へのアクセスの主張や付与」「具体物の位置情報の帰属先」の要素を挙げる。

キーワード：紹興方言、存在表現、制御権、アクセス、“帯” “咚” “亨”

0. はじめに

中国紹興方言では、例(1)～(3)のように、結果状態の持続、人や物（以下「具体物」と呼ぶ）の所在、動作の進行を表す文法形式が、“(来)帯[(le)da]”“(来)咚[(le)don]”“(来)亨[(le)han]”の三体系に分かれている¹⁾。

- (1) 耳机 摆 带 / 咚 / 亨 桌床高头。

イヤホン 置く da/don/han 机-上

[イヤホンは机の上に置いてある]

- (2) 手机 来带 / 来咚 / 来亨 包里。

携帯電話 leda/ledon/lehan カバン-中

[携帯電話はカバンの中にある]

- (3) 小王 来带 / 来咚 / 来亨 看 电视。

王先生 leda/ledon/lehan 見る テレビ

[王先生はテレビを見ている]

例(1)のように、一般動詞の後に“帯”“咚”“亨”を付加すると結果状態の持続が表され、例(2)、例(3)のように、所在を表す動詞“来”(Mandarin Chineseの“在”に該当する)の後に“帯”“咚”“亨”が付く形では具体物の所在や動作の進行が表される。本稿では、この内、

例(1)の結果状態の持続を表す“V帯”“V咚”“V亨”の意味機能について考察を行う。

例(1)の“帯”“咚”“亨”に対して、陶寰(1996)、刘丹青(2003)、盛益民(2014)などは「結果相」のマーカ―であると認定している。しかし、“帯”“咚”“亨”は、例(1)では“摆帯/咚/亨(置いてある)”という結果状態を表すものの、“*撕帯/咚/亨(剥がしてある)”、“*死帯/咚/亨(死んでいる)”などでは結果状態を表すことができない。様々な動詞の直後に付いて広く動作や変化の結果状態を表現できる形式と言えるものではない。「結果相」が動作や変化の結果状態を表す文法形式だとするならば、“帯”“咚”“亨”はそのような文法力が乏しいと言えよう。宋天鴻(2017、2019)では、“帯”“咚”“亨”が例(1)の“摆(置く)”や、下の例(4)の“坐(座る)”のような「動作完了の結果として具体物がある場所に定着する」事態を表す動詞とのみ共起することを指摘している。

(4) 小王 坐 帯 / 咚 / 亨 车里。

王先生 座る da/don/han 車-中

[王先生は車の中に座っている]

例(1)、例(4)のイヤホン、王先生は、それぞれ「置く」または「座る」という動作によって、「机の上に置かれている」「車の中に位置する」状態になる。“V帯”“V咚”“V亨”は、こうした「動作完了の結果として、ある空間領域に具体物が存在すること」を表すための文法形式であると言え、また一種の存在表現と捉えることも可能である。本稿では、宋天鴻(2017、2019)に従い、“V帯”“V咚”“V亨”を存在表現と見なし、その使い分けを考察する²⁾。

1. 問題の所在と研究の目的

従来の研究では主に三つの観点から“帯”“咚”“亨”の使い分けが論じられている。本節ではそれらの分析を示した上で、様々な場面を設定した対話を用い、それが妥当な分析かどうか検証を行う。

まず一つ目は「話し手と具体物との距離関係」による分析である。徐文蔚(1938)、杨葳、杨乃浚(2000)、李玲玲(2009)などは、“帯”“咚”“亨”をそれぞれ「近称」「中称」「遠称」とし、“帯”“咚”“亨”が話し手から段階的に広がる距離に応じて使用されると分析する。また、陶寰(1996)、王福堂(1998)、盛益民(2014)などは“帯”“亨”がそれぞれ「近称」「遠称」を表すものとし、“咚”は状況によって「近称」「遠称」のどちらも表すことができるものとする。“帯”“咚”“亨”が距離に応じて使い分けられる側面は確かに存在する。しかし実際に場面を設定してみると、こうした分析では説明の困難な例も存在することが分かる。例(5)を参照されたい。

(5) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHから鍵の所在を尋ねられてこう言う。[鍵はHの近くの引き出しにある])³⁾

钥匙 摆 #带/咚/#亨 抽斗里。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中

S H 鍵

[鍵は引き出しの中に置いてある]

例(5)における鍵は「話し手から遠い」引き出しに位置する。徐文蔚(1938)等、あるいは陶寰(1996)等の主張に従えば、具体物が話し手から遠い場所に位置する例(5)では“亨”が用いられるはずである。しかしここで用いられるのは“咚”であり、“亨”ではない。陶寰(1996)等は“咚”も“亨”同様、話し手から遠い場所での存在を表すことができると指摘しているが、両者の使い分けに関しては述べておらず、例(5)の使い分けを説明するものではない。

二つ目の観点を見てみよう。二つ目は「話し手、聞き手、具体物の三者の距離関係」に基づく分析である。陈望道(1938)は“带”“咚”“亨”をそれぞれ「近称」「前称」「遠称」と分析し、「近称」「前称」「遠称」を次のように定義している。「近称」は話し手の側にある具体物を指すことである。「前称」は話し手の目の前にあるが、話し手からやや遠く、または聞き手にやや近く、または聞き手からもやや遠い具体物を指すことである。「遠称」は話し手の目の前にない具体物を指すことである。Ling(2008)は、“带”“咚”“亨”を「近称」「中称」「遠称」とし、三者の使い分けを次のように述べる。“带”は具体物が「話し手に近く、かつ、その距離が聞き手よりも近い」場所に位置する場合に用いられる。“咚”は次の二つのどちらかの場合に用いられる。一つは具体物が「話し手からやや離れている」場所に位置する場合であり、もう一つは具体物が「聞き手と同じ」場所、あるいは「聞き手に近く、かつ、話し手とは異なる」場所に位置する場合である。この場合、話し手と具体物との距離関係の如何を問わず常に“咚”が用いられる。“亨”は具体物が「話し手からも聞き手からも遠い」場所に位置する場合に用いられる。陈望道(1938)、Ling(2008)のこうした主張に関しても、次の例(6)のように、やはり適切に説明できない言語事实在存在する。

(6) (SとHは引き出し付きのテーブルの両脇に座っている。SはHから鍵がほしいと言われてこう言う。[鍵は引き出しにある])

a. 钥匙 摆 带/#咚/#亨 抽斗里, 我 拔 偌 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 1SG ~てあげる 2SG 取る

S → 鍵 H

[鍵は引き出しの中に置いてある。私が取ってあげよう]

b. 钥匙 摆 #带/咚/#亨 抽斗里, 偌 己 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 2SG 自分で 取る

S 鍵 ← H

[鍵は引き出しの中に置いてある。自分で取ってください]

例(6a)(6b)は、具体物の鍵がいずれも「SにもHにも近い」引き出しに位置し、さらにSからもHからも等距離にある。つまり話し手、聞き手、具体物の三者の相対的距離関係において、例(6a)(6b)は全く同じ状況にある。違いは例(6a)が話し手自身、鍵にアクセスすることを主張

する点にあり、そこで“帯”が用いられている。一方、例(6b)では話し手が聞き手に鍵へのアクセスを促しており、そこでは“咚”が用いられている。こうして見ると“帯”と“咚”の使い分けを「話し手、聞き手、具体物の三者の物理的距離関係」のみで説明することも難しいということが分かる。

さらに言うと、上に挙げた徐文蔚 (1938)、陶寰 (1996)、陈望道 (1938)、Ling (2008) などの研究は主に平叙文を研究対象に“帯”“咚”“亨”の使い分けを論じたものであり、その考察の中で疑問文における“帯”“咚”“亨”の使い分けに関しては検討がなされていない。

(7) 钥匙 摆 *带/咚/亨 何里?

鍵 置く da/don/han どこ

[鍵はどこに置いてあるか?]

例(7)に示したように、“咚”“亨”は疑問文に用いられるが、“帯”は疑問文に用いられない。疑問文においては、話し手が具体物の位置を把握しているとは考えられず、これも「物理的距離」という基準からの説明が難しい例の一つであろう。

三つ目は証拠性(可視性)とモダリティ(アクセスを促す)という観点からの分析である。

(8) (刑事が望遠鏡で容疑者を監視しながら、隣にいる同僚に)

伊 来带 房间里。

3SG leda 部屋-中

[彼は部屋にいる]

(宋天鴻2015:155 グロス は筆者による)

例(8)では、容疑者が話し手からも聞き手からも離れた場所にいる。従来の研究の主張に従えば、“亨”が用いられるはずの状況である。しかし、例(8)では“帯”のみが用いられ、“亨”はこの状況にそぐわない。宋天鴻 (2015) は、“帯”“咚”“亨”の使い分けは「物理的距離」では説明できないと指摘した上で、その使い分けに関して以下のように述べている。話し手にとって可視的な具体物に“帯”、話し手にとって不可視な具体物に“咚”、話し手や聞き手の双方の可視圏(視界が及ぶ範囲)の外に位置する具体物に“亨”が用いられる。この他、“咚”の使用に関しては、例(6b)のような、聞き手に具体物へのアクセスを促すことといった要素も影響を与える。宋天鴻 (2015) によれば、例(8)で“帯”が用いられるのは、具体物が話し手にとって可視的であるため、となる。しかし、「可視性」という観点からも“帯”の使用を適切に説明できない例が存在する。

(9) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHから鍵の所在を尋ねられてこう言う。)

[鍵はSの近くの引き出しにある])

钥匙 摆 带/#咚/#亨 抽斗里。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中

[鍵は引き出しの中に置いてある]

S	鍵	H
---	---	---

例(9)の引き出しに置かれた鍵は話し手にとって不可視であり、宋天鴻(2015)の主張に従えば、“带”は用いられない状況である。しかし、例(9)では可視的な存在を表す“带”のみが用いられ、不可視の存在を表す“咚”“亨”は用いられない。

このように、「物理的距離」や「可視性」など、これまでの基準では“带”“咚”“亨”の使い分けを十分には説明できないということが分かる。本稿では“带”“咚”“亨”の使い分けには、「話し手または聞き手のどちらが具体物へ先に接近できるか」(平叙文)、「具体物へのアクセスを主張するか、アクセスの権利を付与するか」(平叙文)、「具体物の位置情報へのアクセスが可能かどうか」(疑問文)など、具体物へのアクセスに対する「制御権」が関与していると考える。以下、2節、3節では、その「制御権」について詳しく述べた上で、その基準から、平叙文、及び疑問文における“带”“咚”“亨”の使い分けの分析を試みる。

2. 平叙文における“带”“咚”“亨”の使い分け

2.1 物理的距離からみた“带”“咚”“亨”の使い分け

まずは、“带”が用いられる例(10)~(12)を見てみよう。

(10) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHから鍵の所在を尋ねられてこう言う。

[鍵はSの近くの引き出しにある]) [例(9)の再掲]

钥匙 摆 带/#咚/#亨 抽斗里。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中

S 鍵 H

[鍵は引き出しの中に置いてある]

(11) (Sは会社において、Hは別の場所にいる。Sは電話でHから車の所在を尋ねられてこう言う)

部 车 停 带/#咚/#亨 公司里。

会社

CLF 車 停める da/don/han 会社-中

S 車 H

[車は会社に停めている]

(12) (SとHは台所にいる。SはHからコーヒー豆の所在を尋ねられてこう言う。[コーヒー豆は「SにもHにも近いが、Sにより近い」冷蔵庫にある])

咖啡豆 安 带/#咚/#亨 冰箱里。

台所

コーヒー豆 入れる da/don/han 冷蔵庫-中

S コーヒー豆 H

[コーヒー豆は冷蔵庫に入れてある]

例(10)では、鍵は「引き出し」に置かれている。引き出しは「部屋にいるSに近く、別の部屋にいるHから遠い」場所である。例(11)で、車の位置情報を提示する場所表現は「公司里(会社)」である。会社は車とSが共に位置する場所であり、「会社にいるSに近く、別の場所にいるHから離れた」場所である。例(12)のコーヒー豆は「SにもHにも近いが、Sにより近い」冷蔵

庫にある。例(10)～(12)をみると、具体物が「話し手に近く、かつ、その距離が聞き手よりも近い」と認識される領域に存在することを表す場合には、“帯”が用いられている。

次に、“咚”が用いられる例(13)～(15)を参照されたい。

(13) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHから鍵の所在を尋ねられてこう言う。

[鍵はHの近くの引き出しにある]) [例(5)の再掲]

钥匙 摆 带/咚/亨 抽屉里。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中

S	H 鍵
---	-----

[鍵は引き出しの中に置いてある]

(14) (Sは家にいて、Hは会社にいる。Sは電話でHから車の所在を尋ねられてこう言う)

部 车 停 带/咚/亨 公司里。

CLF 車 停める da/don/han 会社-中

	家	会社
S		H 車

[車は会社に停めている]

(15) (SとHは台所にいる。SはHからコーヒー豆の所在を尋ねられてこう言う。[コーヒー豆は「SにもHにも近いが、Hにより近い」冷蔵庫にある])

咖啡豆 安 带/咚/亨 冰箱里。

コーヒー豆 入れる da/don/han 冷蔵庫-中

	台所	
S	コーヒー豆	H

[コーヒー豆は冷蔵庫に入れてある]

例(13)の鍵は「Hに近く、別の部屋にいるSから遠い」引き出しにある。例(14)では、車とHが共に会社に位置する。会社は「会社にいるHに近く、会社にいないSから遠い」場所である。例(15)のコーヒー豆は「SにもHにも近いが、Hにより近い」冷蔵庫にある。このように、具体物が「聞き手に近く、かつ、その距離が話し手よりも近い」と認識される領域に存在することを表す場合には“咚”が用いられている。Ling (2008) では、具体物が聞き手の近くに存在する場合は常に“咚”が用いられると述べているが、例(12)、例(15)のように、具体物が聞き手に近い場所に位置する場合には、話し手、聞き手のどちらにより近いかつまり、話し手、聞き手、具体物という三者の相対的距離関係によって“帯”“咚”を使い分けていることが分かる。最後に、“亨”が用いられる例文を見てみよう。

(16) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHから鍵の所在を尋ねられてこう言う。

[鍵は「S、Hの両方から離れた」会社にある])

钥匙 摆 带/亨 公司里。

鍵 置く da/don/han 会社-中

		会社
S	H	鍵

[鍵は会社に置いてある]

例(16)では鍵は「SとHから離れた」会社にある。例(16)のように具体物が「話し手、聞き手の両方にとって遠い」と認識される領域に存在することを表す場合には“亨”が用いられる。

以上の例(10)～例(16)は話し手が、聞き手の所在地を自身の所在地と対立するものとして捉えている状況（以下、「対立型」と呼ぶ）における“帯”“咚”“亨”の使い分けである。次に、話し手が自身の所在地を聞き手の所在地と一体化させ「私たちの領域」として捉えている状況（以下、「融合型」と呼ぶ）における“帯”“咚”“亨”の使い分けを見ていこう。

(17) (SとHは部屋にいて、同じところに立っている。SはHに宝探しゲームの準備状況について説明をしている。〔鉛筆は「SとHに近い」引き出し、消しゴムは「SとHからやや離れた」小箱、テープは「SとHから離れた」庭に隠してある〕)

鉛筆	<u>園</u>	帯/#咚/#亨	抽斗里,		庭
鉛筆	隠す	da/don/han	引き出し-中	SH 鉛筆 消しゴム	テープ
橡皮	<u>園</u>	#帯/#咚/#亨	盞子里,		
消しゴム	隠す	da/don/han	小箱-中		
胶带紙	<u>園</u>	#帯/#咚/#亨	花园里,		
テープ	隠す	da/don/han	庭-中		

〔鉛筆は引き出しの中、消しゴムは小箱の中、テープは庭に隠してある〕

例(17)では、話し手は聞き手と同じ場所に立脚し、聞き手に宝探しゲームの準備状況について説明をしている。つまり具体物の存在を話し手と聞き手が融合した視点から捉えている状況だと考えられる。そこでは、「SとHに近い」引き出しに存在する鉛筆には“帯”が用いられ、「SとHからやや離れた」小箱に存在する消しゴムには“咚”が用いられ、「S、Hから遠い」庭に存在するテープには“亨”が用いられている。例(17)のような「融合型」において“帯”“咚”“亨”は「話し手と聞き手」から段階的に広がる距離に応じて使い分けられていることが分かる。先行研究では、“咚”は具体物が「話し手からやや離れている場所」に位置する場合に用いられると単純に述べているが、本稿の分析により、こうした“咚”の用例が「融合型」におけるものであるということが明らかになった。

以上、「物理的距離」という基準に基づいて、「対立型」と「融合型」に分けて“帯”“咚”“亨”の使い分けに関して考察を行った。しかし、1節で指摘したように、「物理的距離」のみでは“帯”“咚”“亨”の使い分けを適切に説明できない状況も存在する。以下、2.2節では「制御権が関わる場合」「存在発見文の場合」に分けて、「物理的距離」では説明できない“帯”“咚”“亨”の使い分けについて考察する。

2.2 物理的距離から説明できない“帯”“咚”“亨”の使い分け

2.2.1 制御権が関わる場合

まず、例(18)を見てみよう。

(18) (SとHは引き出し付きのテーブルの両脇に座っている。SはHから鍵がほしいと言われてこう言う。〔鍵は引き出しにある〕) [例(6)の再掲]

a. 钥匙 摆 带/#咚/#亨 抽斗里, 我 拨 借 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 1SG ~てあげる 2SG 取る

S → 鍵 H

[鍵は引き出しの中に置いてある。私が取ってあげよう]

b. 钥匙 摆 #带/咚/#亨 抽斗里, 借 己 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 2SG 自分で 取る

S 鍵 ← H

[鍵は引き出しの中に置いてある。自分で取ってください]

例(18a)(18b)は、鍵がどちらも「SにもHにも近く、かつ、S、Hのどちらからも同じ距離」にあるにも関わらず、“帯”“咚”を使い分ける例である。ここにおける“帯”“咚”の使い分けは「物理的距離」という基準では説明しきれない。本稿では、例(18a)(18b)に示されるような、具体物へのアクセスの主張、アクセスの促し、アクセスの権利の聞き手への譲渡など、具体物へのアクセスに対する「制御権」が“帯”“咚”“亨”の使い分けに関与していると考え。まずは本稿で用いる「制御権」を具体的に説明する。「話し手、聞き手、具体物」の三項対立で見ると、原則的には話し手（もしくは聞き手）が具体物に近ければ近いほど、聞き手（もしくは話し手）よりも具体物へ先にアクセスすることが可能である。このとき話し手（もしくは聞き手）は具体物に対して「制御権」を持つと見なす。逆に、話し手（もしくは聞き手）が具体物から離れている場合、具体物へのアクセスがしにくくなる。このとき具体物に対して「制御権」は持たない。ただし例(18a)(18b)に示したように、「制御権の帰属」は物理的距離のみで決まらない場合もある。具体物へのアクセスを主張したり、促したりすることに影響されうるものである。以下では、そうした「制御権の帰属」を決める基準を探りつつ、同時に“帯”“咚”“亨”の使い分けに関して考察を行う。

(19) (SとHは部屋にいる。SはHから資料が欲しいと言われてこう言う。[パソコンはSに近く、かつ、Hよりも近い場所にある])

a. 资料 存 带/#咚/#亨 电脑里, 我 发 拨 借。

資料 保存する da/don/han パソコン-中 1SG 送る ~てあげる 2SG

S → 資料 H

[資料はパソコンに保存しているので、私が送ってあげる]

b. 资料 存 带/#咚/#亨 电脑里, 借 己 来 拷贝。

資料 保存する da/don/han パソコン-中 2SG 自分で 来る コピーする

S 資料 ← H

[資料はパソコンに保存しているので、あなたは自分でコピーしてください]

例(19a)(19b)では、資料は「Sに近く、かつ、その距離がHよりも近い」パソコンに保存されている。例(19a)では、SはHに資料の所在情報を伝えた後で資料をHに転送することを申し出ている。反対に例(19b)では、SがHに直接資料にアクセスしてほしいと促している。例(18a)(18b)とは異なり、例(19a)(19b)の場合にはどちらも“帯”が用いられる。例(19a)(19b)は、具体物が「話し手に近く、かつ、その距離が聞き手よりも近い」場所に位置しており、聞き手に具体物へのアクセスが認められるかどうかに関わらず、話し手は具体物へアクセスしようと

思えば（アクセスを許可したにもかかわらず、聞き手の侵入に反撃するなど、協力的でない行動も含め）常に聞き手より先に接近できる立場にある。そのため、例(19a)(19b)では、いずれも具体物が話し手の「制御権」を持つ領域に存在すると見なされ、“帯”が用いられている。

(20) (SとHは旅行先のホテルの部屋にいる。SはHから充電ケーブルを貸してほしいと言われてこう言う。[充電ケーブルはHに近く、かつ、Sよりも近いスーツケースに入れてある])

a. 充電線 安 [#]帯/咚/[#]亨 箱子里,

充電ケーブル 入れる da/don/han スーツケース-中

S → 充電ケーブル H

我 拨 借 驮。

1SG ~てあげる 2SG 取る

[充電ケーブルはスーツケースに入れてある。私が取ってあげる]

b. 充電線 安 [#]帯/咚/[#]亨 箱子里,

充電ケーブル 入れる da/don/han スーツケース-中

S 充電ケーブル ← H

借 己 驮。

2SG 自分で 取る

[充電ケーブルはスーツケースに入れてある。自分で取ってください]

例(20a)(20b)では、充電ケーブルは「Hに近く、かつ、その距離がSよりも近い」スーツケースに位置する。この場合、Sが充電ケーブルを取りに行く場合においても、Hに充電ケーブルを取ってほしいとアクセスを促す場合においても“咚”が用いられる。これは具体物が「Hに近く、かつ、その距離がSよりも近い」場所に位置し、聞き手が話し手よりも充電ケーブルへ常に先に接近できる立場にあるためである。例(20a)(20b)では、具体物が聞き手の「制御権」を持つ領域に存在するとみなされることで、“咚”が用いられている。

(21) (Sは訪問先に着いたが、Hはまだ訪問先に向かっている途中である。Sは手土産のお茶を家に忘れたことに気づいて、電話でHにこう言う)

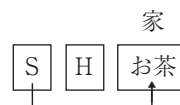
a. 哎呀， 茶叶 摆 [#]帯/咚/[#]亨 餐桌高头， 弗 驮。

しまった お茶 置く da/don/han テーブル-上 NEG 取る

我 信仰 回转去 驮。

1SG 今 帰る-回る-行く 取る

[しまった。お茶をテーブルの上に置いたまま、持ってくるのを忘れた。私は今家に帰って取りに行く]



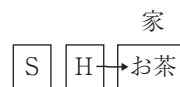
b. 茶叶 摆 [#]帯/咚/[#]亨 餐桌高头,

お茶 置く da/don/han テーブル-上

借 回转去 驮。

2SG 帰る-回る-行く 取る

[お茶はテーブルの上に置いてあるから、取りに行ってください]



例(21a)(21b)では、お茶は「S、Hから離れた」テーブルに置かれている。Sがお茶を取りに行く例(21a)では“亨”、Hにアクセスを促す例(21b)では“咚”が用いられている。例(21a)では、話し手がお茶を取りに行くと言うものの、お茶は話し手からも聞き手からも離れており、話し手も聞き手も「制御権」を持たない領域に位置すると見なされている。そこで“亨”が用いられるのである。例(21b)で“咚”が用いられるのは、聞き手が現場(=家)に到着した後の場面を想定した話し手が、観念上の現場において、聞き手に寄り添った状態で具体物の所在について聞き手にナビゲーションをしているためであろう。その場合、お茶の所在地であるテーブルはアクセスする本人である聞き手に近い場所となる。具体物が聞き手の「制御権」を持つ領域に位置すると見なされたために、“咚”が用いられていると考えられる。

ここで例(22)[例(6)の再掲]をもう一度参照されたい。

(22)(SとHは引き出し付きのテーブルの両脇に座っている。SはHから鍵がほしいと言われてこう言う。[鍵は引き出しにある]) [例(6)の再掲]

a. 钥匙 摆 带/#咚/#亨 抽斗里, 我 拨 侬 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 1SG ~てあげる 2SG 取る

S→鍵 H

[鍵は引き出しの中に置いてある。私が取ってあげよう]

b. 钥匙 摆 #带/咚/#亨 抽斗里, 侬 己 驮。

鍵 置く da/don/han 引き出し-中 2SG 自分で 取る

S 鍵←H

[鍵は引き出しの中に置いてある。自分で取ってください]

上の例(22a)(22b)では、鍵はSにもHにも近く、かつ、SからもHからも同じ距離にあるため、アクセスにおける物理的な制御性が拮抗している。例(22a)では、話し手が鍵へのアクセスを主張しているため、具体物が話し手の「制御権」を持つ領域に存在すると認識され、“带”が用いられている。一方、例(22b)では、話し手が聞き手に鍵へのアクセスを促しており、アクセスする権利を聞き手に与えている。そのため具体物が聞き手の「制御権」を持つ領域に存在すると見なされ、“咚”が用いられていると考えられる。

以上、「対立型」の例を用い、「制御権」という基準から“带”“咚”“亨”の使い分けを考察した。結論をまとめると表1のようになる。

表1 “带” “咚” “亨” の使い分け

具体物との物理的距離関係		制御権の帰属と“带”“咚”“亨”の使い分け	
話し手に近い	聞き手よりも近い	話し手・“带”	
	聞き手と同距離	話し手・“带” [アクセスを主張する]	聞き手・“咚” [アクセスを促す]
	聞き手により近い	聞き手・“咚”	
話し手から遠い	聞き手に近い		
	聞き手から遠い	第三者・“亨”	聞き手・“咚” [アクセスを促す]

表1に示したように、「制御権」は基本的には「物理的距離」によって決定される。一般的に、具体物が「話し手に近く、かつ、その距離が聞き手よりも近い」領域に位置するならば、話し手は具体物に対して「制御権」を持つと考えられ、その場合“帯”が用いられる。同様に具体物が「聞き手に近く、かつ、その距離が話し手よりも近い」領域に位置する場合、聞き手が具体物に対して「制御権」を持つと見なされ、その場合に“咚”が用いられる。そして、具体物が「話し手、聞き手の両方にとって遠い」領域に位置する場合、話し手も聞き手も具体物に対して「制御権」を持たないと考えられ、その場合には“亨”が用いられる。具体物へのアクセスにおいて物理的な制御性が拮抗する場合には、話し手自身がアクセスを主張する際に“帯”、聞き手にアクセスを促す際に“咚”が用いられる。例(21b)で、聞き手に対し「話し手からも聞き手からも遠い領域」へのアクセスを促す例を見たが、具体物の存在を捉える際には、話し手、聞き手が立脚する物理的世界のみではなく、聞き手の視点に寄り添いナビゲーションをする場合のように、聞き手が存在する観念上の現場から捉えることも可能である。その場合、具体物はアクセスする当人である聞き手に近いと認識され、“咚”が用いられる。

最後に、「融合型」では、話し手または聞き手のどちらが先に具体物へアクセスすることができるかという「制御権」に言及する必要がない。そのため、“帯”“咚”“亨”は、例(17)に示したように、話し手と聞き手が共に立脚する領域から段階的に広がる距離に応じて使用される。

2.2.2 存在発見文の場合

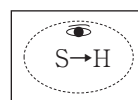
本稿では、現場において具体物の存在を認識したことを語る文を「存在発見文」と呼ぶ。以下、「存在発見文」における“帯”“咚”“亨”の使い分けを考察する。

(23) (Sは部屋に入ると、Hが床に寝転んでいるのを見た)

偌 好端端 个 眠床 弗 睏, 睏 帯/#咚/#亨 地下 呶。

2SG 良い PART ベッド NEG 寝る 寝る da/don/han 床 SFP

[ちゃんとベッドがあるのに、床に寝転んでいるとは]

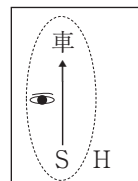


(24) (刑事Sが望遠鏡で容疑者の行動を監視しながら、隣にいる刑事Hに言う)

部 车 停 帯/#咚/#亨 7-11沿里,

CLF 車 停める da/don/han セブンイレブン-隣

[車はセブンイレブンの近くに停めている]



物理的距離の基準から見ると、例(23)で存在の対象として捉えられたHは聞き手自身であり、当然聞き手に一番近いため、“咚”が用いられるはずである。また、例(24)では、車はS、Hの両方から離れている。ここでは“亨”が用いられると予想される。しかし、例(23)(24)ではどちらも“帯”が用いられている。2.2.1節に挙げた例はいずれも具体物の存在を「話し手、聞き手、具体物の三項対立」から捉える状況であった。それに対し、例(23)(24)は話し手が具体物の存

在を発見した状況である。この場合に述べられているのは、具体物がどこに存在するのか、ということよりも、話し手が視覚で直接捉えた領域に存在する、ということである。ここでは具体物の存在が「話し手と具体物の二項対立」から捉えられているのであろう。例(23)(24)のような「存在発見文」において、現場における存在を捉える場合は“帯”が用いられる。

3. 疑問文における“帯”“咚”“亨”の使い分け

具体物が位置する場所を尋ねる場合、“帯”の使用は観察されない。次の例(25)は“咚”が用いられる例文である。

(25) (子供は母親にSwitchを取り上げられた。子供は父親に尋ねている)

Switch 園 *帯/咚/#亨 何里?

Switch 隠す da/don/han どこ

子供 父親 (Switch?)

[Switchはどこに隠されているの?]

例(25)は、話し手である子供がSwitchの位置情報に関して全く手がかりを持たず、父親に尋ねている状況である。上述したようにこうした例における“帯”“咚”“亨”の使い分けを「物理的距離」から分析するのは難しい。本稿では、疑問文の場合における「具体物へのアクセスに対する制御権」を「具体物の位置情報へのアクセスが可能かどうか」と定義することで分析を試みる⁴⁾。例(25)では、話し手が具体物の情報を持たず、当該情報を把握している（あるいは把握していると想定される）聞き手に尋ねている。ここで具体物はアクセス可能な聞き手が制御権を持つ領域に存在すると見なされている。そのため“咚”が用いられていると考えられる。

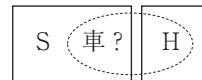
(26) (Sは駐車場にいて、Hは別の場所にいる。Sは電話でHに車を駐車場のどこに停めているかを尋ねている)

部 车 停 *帯/咚/#亨 何里?

CLF 车 停める da/don/han どこ

[車はどこに停めているか?]

駐車場



例(26)でも話し手は車が駐車場のどこかに停めてあるということは把握しているものの、車の正確な位置情報、つまり、車が自分に近いかどうかは把握していない。ここで“咚”が用いられるのも、やはり車がその位置情報を把握している（あるいは把握していると想定される）聞き手の制御権を持つ領域に位置すると認識されているからである。

次の例(27)は“亨”が用いられる例文である。

(27) (刑事Sと刑事Hが容疑者をくまなく探したが、結局見つからなかった。刑事Sが刑事Hにこう言う)

靠 伊 会 躲 *帯/#咚/亨 何里 哩?

それなら 3SG ~だろう 隠れる da/don/han どこ SFP

SH 犯人?

[それなら、彼は一体どこに隠れているのだろうか?]

例(27)では、話し手の刑事Sは、自分も聞き手の刑事Hも犯人の所在を知らないと把握しており、その上で、犯人はどこにいるのだろうかという疑念を表出している。話し手も聞き手も犯人の所在情報を把握していないことが明らかになった場合においては、犯人が話し手も聞き手も制御権を持たない領域に位置すると認識されて、“亨”が用いられることになる。

疑問文における“咚”と“亨”の使い分けには「物理的距離」や「話し手が具体物へのアクセスを主張すること」などの要素が影響を与えることもある。

(28) (Sは部屋にいて、Hは別の部屋にいる。Sは電話でHからHがXデパートにカフェを開いたことを聞いて、Hにこう言う)

a. 偌 片 店 开 *帯/#咚/亨 几楼里?

2SG CLF 店 開く da/don/han 何階-中

Xデパート



[あなたの店は何階にあるの?]

b. 偌 片 店 开 *帯/咚/#亨 几楼里?

2SG CLF 店 開く da/don/han 何階-中

Xデパート



我 呆歇 到 偌 店里 去 咖啡 吃 杯 来。

1SG 後で ~に 2SG 店-中 行く コーヒー 飲む CLF 来る

[あなたの店は何階にあるの? 後であなたのお店にコーヒーを一杯飲みに行ってよようと思っている]

例(28a)でSはカフェがXデパートの何階に存在するのかわからないが、SとHの現在地から離れたXデパートに位置することは把握している。ここでは具体物が物理的に話し手、聞き手の両方から離れた場所、すなわち、話し手も聞き手も「物理的な制御権」を持たない領域に位置しており、“亨”が用いられている。例(28b)でも同様にSはカフェがS、Hの両方から遠いXデパートにあることを把握しているが、ここではカフェの所在を尋ねると同時にカフェに行くことも表明している。例(28b)は、話し手が現場に到着した場面を想定し、観念上の現場に立脚して聞き手にナビゲーションを要請している状況だと考えられる。その現場において、話し手はカフェがどこに位置するのかわ把握せず、聞き手の情報を求めている。そのためカフェが聞き手の「情報へのアクセスにおける制御権」を持つ領域に位置すると認識され、“咚”が用いられるのである。

以上のことから、疑問文においては基本的に「情報の帰属先」によって「制御権の帰属」が

決められることが分かる。具体物の位置情報に関して、話し手が把握しておらず、聞き手が把握していると思われる場合には、具体物は聞き手が制御権を持つ領域に存在すると認識され、“咚”が用いられる。話し手も聞き手も情報を持たない場合には、具体物は話し手も聞き手も制御権を持たない領域に存在すると見なされ、“亨”が用いられる。ただし、具体物が「物理的に話し手からも聞き手からも離れたどこか」に位置することを把握した上でその位置情報を尋ねる場合は、物理的距離による基準が適用されて「制御権の帰属」が決まり、“亨”が用いられる。最後に、疑問文において“帯”が用いられない現象について説明する。話し手が具体物の位置情報を把握していないということは、当該の情報へのアクセスが可能であるかどうかという面において、具体物が話し手の制御権を持つ領域の外に位置すると認識されるということである。そのため、疑問文において話し手が制御権を持つ領域に存在することを表す“帯”は用いられないと言うことができる。

4. 終わりに

本稿では、「制御権」という基準から存在表現“V帯”“V咚”“V亨”の使い分けを分析し、次のことを指摘した。話し手が制御権を持つ領域での存在に“帯”、聞き手が制御権を持つ領域での存在に“咚”、話し手も聞き手も制御権を持たない領域での存在に“亨”が用いられる。「具体物へのアクセスに対する制御権」は次のような基準によって決定される。

平叙文の場合は、表1に示すように、制御権の帰属は基本的には「物理的距離」によって決定されるが、話し手が具体物へのアクセスを主張すること、聞き手にアクセスを促すことなどの要素にも影響を受ける。

表1 (再掲) “帯” “咚” “亨” の使い分け

具体物との物理的距離関係		制御権の帰属と“帯” “咚” “亨” の使い分け	
話し手に近い	聞き手よりも近い	話し手・“帯”	
	聞き手と同距離	話し手・“帯” [アクセスを主張する]	聞き手・“咚” [アクセスを促す]
	聞き手により近い	聞き手・“咚”	
話し手から遠い	聞き手に近い		
	聞き手から遠い	第三者・“亨”	聞き手・“咚” [アクセスを促す]

疑問文においては基本的に「情報の帰属先」によって「制御権の帰属」が決まる。聞き手が具体物の位置情報を把握している（あるいは把握していると想定される）場合は“咚”、話し手も聞き手も具体物の位置情報を持たない場合は“亨”が用いられる。ただし、具体物が「物理的に話し手からも聞き手からも離れたどこか」に位置することを把握した上でその位置情報を尋ねる場合は、物理的距離による基準が適用され、“亨”が用いられる。そして、話し手が具体物の位置情報を把握していないことから、話し手が制御権を持つ領域に存在することを表す“带”は用いられない。

存在発見文において「話し手と具体物の二項対立」から現場における存在を捉える場合には“带”が用いられる。これを「情報の帰属先」という基準から見れば、話し手が具体物の存在を発見したと主張すること、それはその具体物が「話し手の制御権を持つ領域」に存在すると見なしているということでもある。それを反映し“带”が用いられるといえることができる。

呉方言に属する義烏方言においても、結果状態の持続、具体物の所在、動作の進行を表す形式は“(在)糯”“(在)面”“(在)栋”の三体系に分かれていることがこれまでに指摘されている。陈望道(1938)は、義烏方言の“(在)糯”“(在)面”“(在)栋”は紹興方言の“(来)带”“(来)咚”“(来)亨”と同じように使い分けしていると述べているが、用例分析を行っているわけではない。管見の限りでは、“糯”“面”“栋”の使い分けを詳細に考察した研究は存在しない。本稿では、「制御権」という基準に基づいて紹興方言の“带”“咚”“亨”の使い分けを考察したが、「制御権」という基準から義烏方言の“糯”“面”“栋”の使い分けを同様に捉えることができるかどうか、また、話し手、聞き手、具体物の三者の対立から具体物の存在を捉える言語現象が呉方言において普遍性を持つのかどうかについてはさらなる検証が必要である。

付 記

本稿は筆者が東京大学大学院総合文化研究科へ提出した博士論文の一部に加筆修正をしたものである。

注

- 1) 本稿で使う例文は全て作例であるが、母語話者による客観的なチェックを経たものである。例文のクロスは次の通りである。1SG：一人称単数/2SG：二人称単数/3SG：三人称単数/CLF：量詞/NEG：否定接辞/PART：構造助詞/SFP：文末助詞/le：来/da：带/donj：咚/hanj：亨/*：非文/#：文法的には正しいが、語用論的に誤りのある文。
- 2) 宋天鴻(2017, 2019)では、“带”“咚”“亨”に関して、動詞の直後だけではなく「仓库里摆老酒带/咚/亨。(倉庫-中-置く-紹興酒-da/donj/hanj, 倉庫に紹興酒が置いてある)」、「茶几高头有盞饼干带/咚/亨。

(茶卓-上-ある-CLF-クッキー-da/don/han、茶卓の上にクッキーが一箱ある)、「墻壁雪雪白帶/咚/亨」(壁-雪のように白い-da/don/han、壁はとても白い)のような、動詞句、存在表現「“有+NP”」、形容詞の後に用いられる例を挙げている。こうした様々な述語形式の後に接続される“帶”“咚”“亨”は「接語」(clitic)と見なすべきであろう。

- 3) 本稿では、例文の状況を説明する際に、話し手 (speaker) をSと表記し、聞き手 (hearer) をHと表記する。また、物理的空間領域を「実線の枠」、それ以外の領域を「点線の囲み」により表示する。
- 4) 本稿で言う「情報の帰属先」は当該情報を把握している (あるいは把握していると想定される) 当事者のことを指す。本稿の「情報の帰属先」が『情報のなわ張り理論』(神尾1990) で言われる「当該情報と話し手または聞き手との心理的距離」を基準にしたものではないことをここで断っておく。

参考文献

- 陈望道 (1938) 「说存续表现的两式三分」,署名雪帆,『译报』副刊『语文周刊』第9期,『陈望道文集』(1981) 第三卷所收:310-314页。上海:上海人民出版社。
- 李玲玲 (2009) 「绍兴话“来X”复合词」,『杭州师范大学学报』(社会科学版)第2期:117-120页。
- 刘丹青 (2003) 『语序类型学与介词理论』。北京:商务印书馆。
- 盛益民 (2014) 『吴语绍兴柯桥话参考语法』。南开大学博士学位论文。
- 陶寰 (1996) 「绍兴方言的时间标记」,载李如龙、张双庆主编『方言的体』:302-330页。香港:香港中文大学吴多泰中国语文研究中心。
- 王福堂 (1998) 「绍兴方言中表处所的助词“东*”、“带*”、“亨*”」,『语言学论丛』第21辑:1-11页。北京:商务印书馆。
- 徐文蔚 (1938) 「“哼”“东”和“带”」,『译报』副刊『语文周刊』第6期,『陈望道文集』(1981) 第三卷所收:304-307页。上海:上海人民出版社。
- 杨葳、杨乃浚 (2000) 『绍兴方言』。北京:国际文化出版公司。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』。東京:大修館書店。
- 宋天鴻 (2015) 「紹興方言の所在表現“来带”“来咚”“来亨”」,『中国語学』第262号:153-167頁。
- (2017) 「紹興方言における動詞接辞“带”“咚”“亨”の意味と機能」,『漢語与漢語教学研究』第8号:49-60頁。
- (2019) 「中国紹興方言における“带[da]”“咚[don]”“亨[han]”の包括的研究」。東京大学大学院総合文化研究科博士論文。
- Ling, Jinchun (2008) *On the Grammatical Function and Status of “da” “don” and “han” in Shaoxing Dialect*. MA Research Paper. The Chinese University of Hong Kong.

(そう・てんこう 英語国際学部助教)